

平成27年度
全国学力・学習状況調査
鹿児島県結果分析



平成27年10月
鹿児島県教育委員会

平成27年度全国学力・学習状況調査について

1 調査の目的

全国学力・学習状況調査は、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立て、さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立することを目的に文部科学省が実施しているものです。

2 調査結果について

本調査の結果は、小学校の国語・算数・理科、中学校の国語・数学・理科の学力の一部を示したものであり、本県の児童生徒の学力の全てを測定したものではありません。

また、学校の教育活動は、多面的、総合的に行われるものであるため、調査結果は、あくまで学校における教育活動の一側面です。これらの点に御留意ください。

目次

○ 県全体の調査結果〔公立〕	1
1 教科に関する調査の結果概要	2
2 教科別及び観点別の結果	3
3 地区別の結果概要	7
4 指導法改善のポイント	9
・小学校国語 A・B	9
・中学校国語 A・B	12
・小学校算数 A・B	15
・中学校数学 A・B	18
・小学校理科	21
・中学校理科	24
5 児童生徒質問紙及び学校質問紙の結果概要	27
6 全体考察	34
○ 市町村別の調査結果	40

県全体の調査結果〔公立〕

本県の調査実施状況

1 調査の期日

平成27年4月21日（火）

2 調査の概要

- 対象学年： 小学校第6学年，中学校第3学年
- 対象教科： 国語，算数・数学，理科
- 調査内容： 国語と算数・数学については，主として「知識」に関する問題「A問題」と，主として「活用」に関する問題「B問題」を出題。理科については，「知識」に関する問題と「活用」に関する問題を一体的に出題。
生活習慣や学習環境等に関しては，質問紙により調査。
※ 理科は，「知識」に関する問題と「活用」に関する問題が一体的に出題されているが，本報告書においては「知識」に関する問題と「活用」に関する問題を分けて分析している。この分類は文科省の設定によるものである。

3 調査実施校及び調査を実施した児童生徒数

○ 小学校	： 506校	14,692人
○ 中学校	： 216校	14,931人
○ 特別支援学校	： 5校	17人
	計	727校
		29,640人

1 教科に関する調査の結果概要

(1) 本県の教科に関する調査の結果

ア 小学校の平均正答率

	教科	平成27年度			平成26年度(前回悉皆)			平成25年度(前々回悉皆)			
		県平均正答率	全国平均正答率	全国・県平均との差	県平均正答率	全国平均正答率	全国・県平均との差	県平均正答率	全国平均正答率	全国・県平均との差	
小学校 (6年)	国語	A	68.4	70.0	-1.6	72.5	72.9	-0.4	64.7	62.7	2.0
		B	65.8	65.4	0.4	55.2	55.5	-0.3	47.9	49.4	-1.5
	算数	A	75.9	75.2	0.7	78.5	78.1	0.4	78.8	77.2	1.6
		B	42.5	45.0	-2.5	55.3	58.2	-2.9	56.7	58.4	-1.7
	理科		63.4	60.8	2.6						

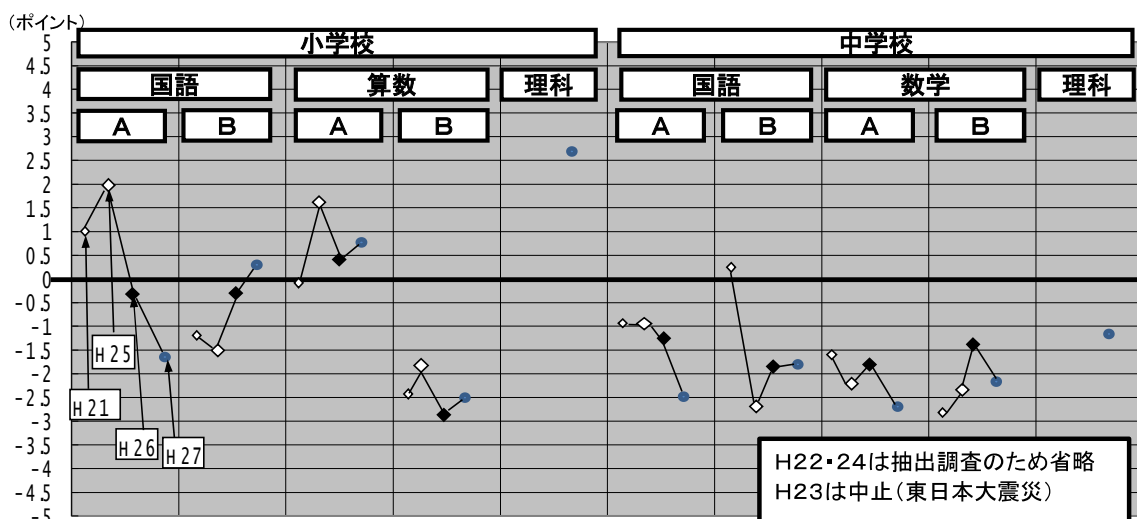
※平成24年度、理科の正答率62.7～64.1(県), 60.8～61.1(全国)(抽出調査のため95%信用区間として発表)

イ 中学校の平均正答率

	教科	平成27年度			平成26年度(前回悉皆)			平成25年度(前々回悉皆)			
		県平均正答率	全国平均正答率	全国・県平均との差	県平均正答率	全国平均正答率	全国・県平均との差	県平均正答率	全国平均正答率	全国・県平均との差	
中学校 (3年)	国語	A	73.3	75.8	-2.5	78.1	79.4	-1.3	75.4	76.4	-1.0
		B	64.1	65.8	-1.7	49.1	51.0	-1.9	64.8	67.4	-2.6
	数学	A	61.7	64.4	-2.7	65.5	67.4	-1.9	61.5	63.7	-2.2
		B	39.4	41.6	-2.2	58.4	59.8	-1.4	39.2	41.5	-2.3
	理科		51.9	53.0	-1.1						

※平成24年度、理科の正答率48.9～50.2(県), 50.9～51.1(全国)(抽出調査のため95%信用区間として発表)

(2) 全国平均正答率との比較(経年変化)



※ このグラフは県の平均と全国の平均との差を表したものの
 ◇ 平成21年度 ◇ 平成25年度
 ◆ 平成26年度 ● 平成27年度

2 教科別及び観点別の結果

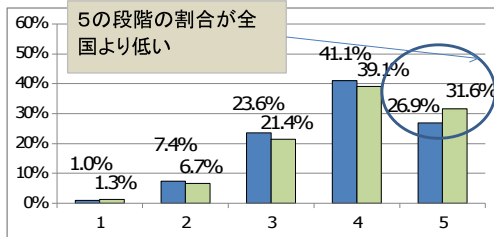
(1) 教科別の正答率分布から

正答率分布グラフについて

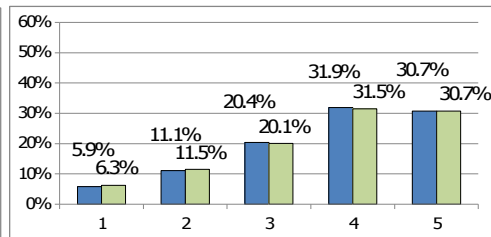
- ※ グラフは、児童生徒の分布を示したものです。
- ※ グラフの横軸は、正答率を5段階に分けて示しています。
1: 0%~20%未満, 2: 20%~40%未満, 3: 40%~60%未満, 4: 60%~80%未満, 5: 80%~100%
- ※ グラフの縦軸は、各段階の児童生徒数を割合で示しています。
- ※ 左が本県、右が全国を表しています。

【小学校】 鹿児島県 全国

〔国語A〕



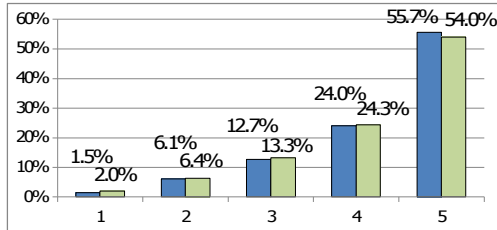
〔国語B〕



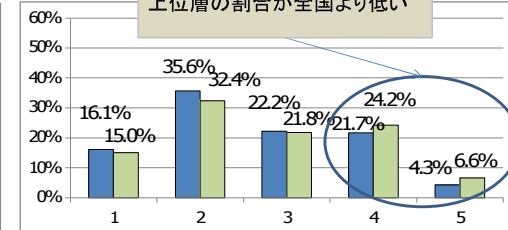
〈課題〉

- ・国語Aは5の段階の児童の割合が全国平均を大きく下回っており、中位層を上位層へ引き上げることが必要である。国語Bは全国とほぼ同様の分布である。
- ・特に国語Aについては、文中の主語を捉えること、国語Bについては、目的や意図に応じて見出しを付けることなどに課題が見られる。

〔算数A〕



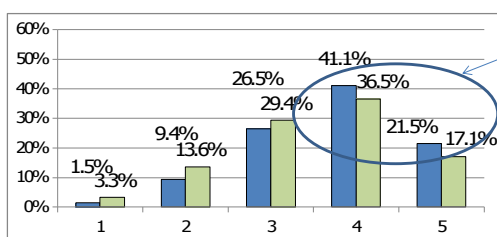
〔算数B〕



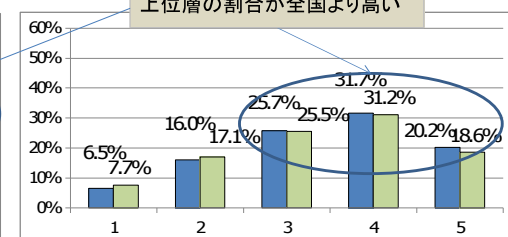
〈課題〉

- ・算数Aは全体的に全国と同様の傾向となっているが、上位層は全国を上回っている。一方、算数Bは上位層が全国を大きく下回っていることに加え、分布状況が二極化する傾向が見られる。そのため、思考力・判断力・表現力を高めるための授業改善が十分ではない。
- ・特に算数Aについては、単位となる小数の幾つ分で小数の大きさを表すこと、算数Bについては、作図の際に用いられる図形の約束や性質の理解、基準量・比較量、割合の関係を捉え、基準量を求めることなどに課題が見られる。

〔理科A〕



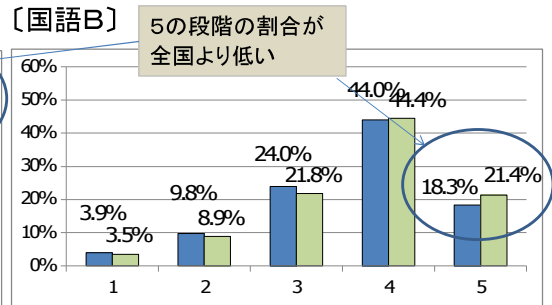
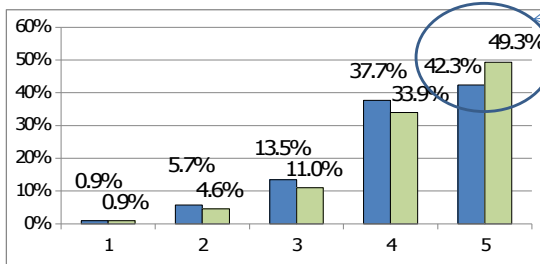
〔理科B〕



〈課題〉

- ・理科A、Bともに上位層が全国を上回っている。
- ・設問ごとの平均正答率も全国の状況と比べて特に劣るところは見られないが、結果を基に考察するなどB問題の科学的な思考・表現の問題に課題が見られる。

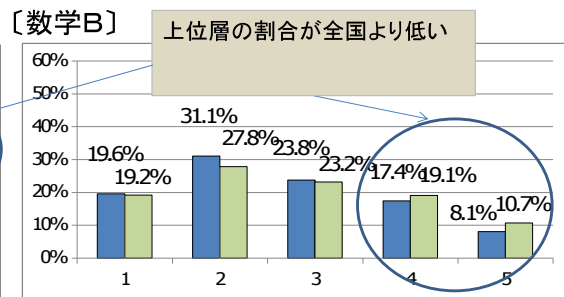
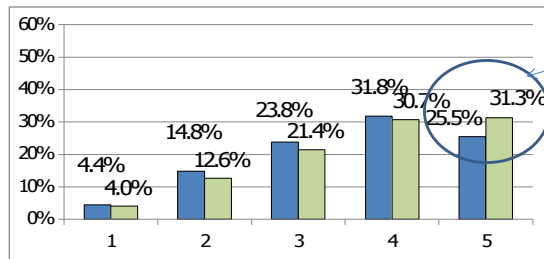
【中学校】 ■ 鹿児島県 ■ 全国
〔国語A〕



〈課題〉

- ・国語A、Bともに5の段階の生徒の割合が全国平均を下回っており、上位層への引き上げが必要である。思考力・判断力・表現力等の質を高めるための授業改善が求められる。
- ・特に国語Aについては語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと、国語Bについては文章の中心的部分と付加的な部分を読み分け、要旨を捉えることなどに課題がある。

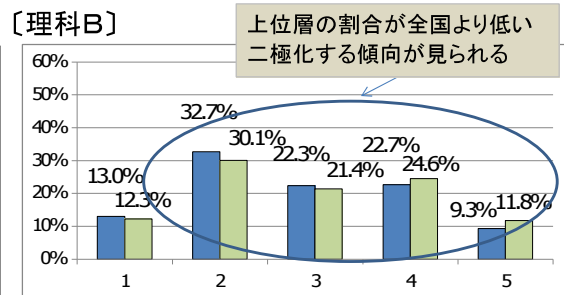
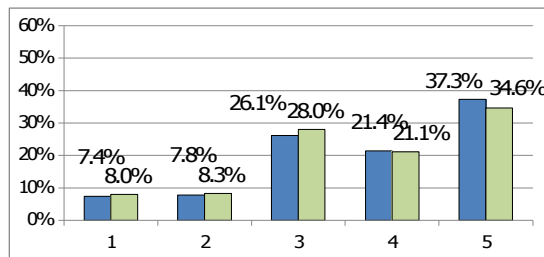
〔数学A〕



〈課題〉

- ・数学Aは上位層の割合が全国を大きく下回っている。数学Bは全国と同様の傾向を示しているが、上位層が全国を下回っている。今後、思考力・判断力・表現力を高めるための授業改善がさらに求められる。
- ・特に数学Aにおいては、数量や図形についての知識や理解、等式変形、数学Bについては、図形の証明やグラフの意味を読み取ることなどに課題がある。

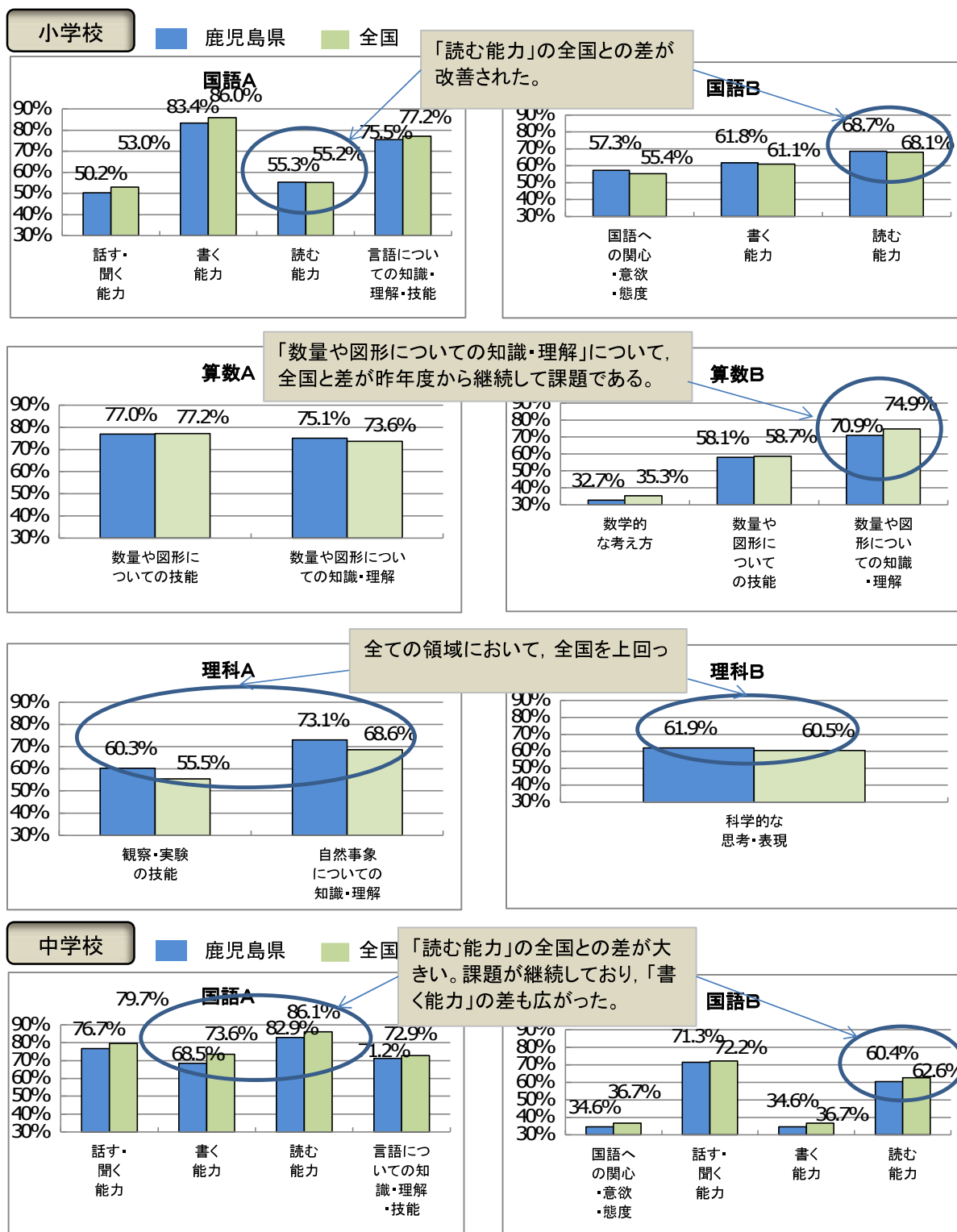
〔理科A〕

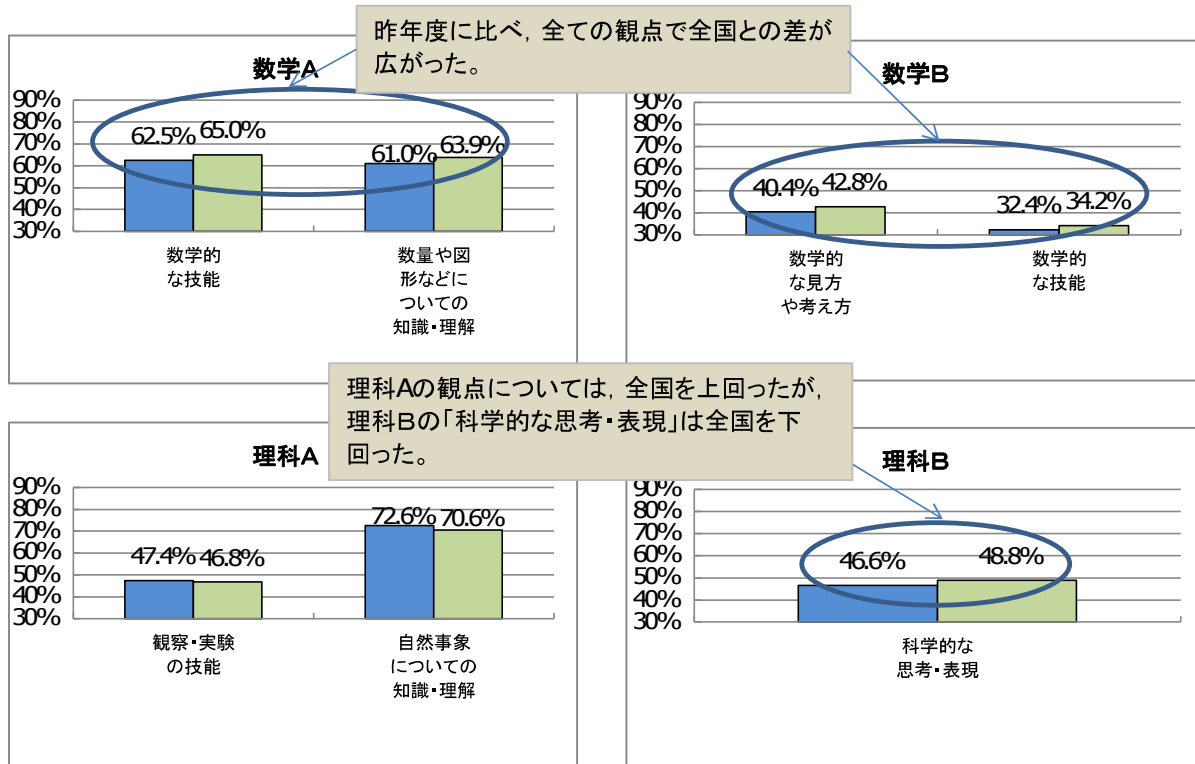


〈課題〉

- ・理科Aについては、上位層の割合も高い。一方、理科Bは上位層が全国を下回っていることに加え、分布状況が二極化する傾向が見られる。
- ・理科Aについては、大きな課題は見当たらなかったが、理科Bについては、自然の事物・現象から問題を見だし、適切に課題を設定することや予想や仮説を設定し、検証する実験を計画するなど、実験などを計画することに課題が見られた。

(2) 観点別の平均正答率から





(3) 改善策

全体の傾向として、昨年の調査に引き続き、全国と比べると正答率の高い上位層が少なく、下位から中位層が多い分布となっている。活用の問題に関して、依然として課題が見られる結果となったが、基礎的・基本的な問題に関して全国との差が広がったものもある。

これらの課題を解決し、児童生徒の学力向上につなげるためには、引き続き、授業の質的な向上を図ることが必要であり、児童生徒に達成させようとする目標の質(基礎的・基本的な知識や技能を活用できるところまで高めようとしているか等)、授業で取り扱う教材や学習活動の質(知識等の教え込みに偏ることなく、児童生徒の主体的な追究、気付きを引き出すものか等)を問い直さなければならない。

また、中学校入学段階での基礎的・基本的な学力が定着していない生徒にとっては、学習内容や学習進度の変化に適応することがなかなか難しく、学力の定着が図られにくい傾向がある。今後、小中連携において、当該学年の全体的な傾向だけでなく、一人一人の学力の状況について情報をつなぎ、支援・指導に生かせるような連携の一層の推進が不可欠である。

そのため、各学校においては、「学びの羅針盤」や「かごしま学力向上支援Webシステム」を積極的に活用したり、授業サポートの機会を生かして近隣の学校も授業を参観し合うなどして教員同士の絆を深め、指導法改善のための工夫を進めたりすることが必要である。また、全ての教科、領域を通して、言語活動を充実させ、児童生徒の主体的な学びを推進していくことも必要である。

なお、各教科の指導の改善に当たっては、「4 指導法改善のポイント」で詳述する。

(国語科) ・よりよく伝え合うために相手意識や目的意識を明確にし、伝え合う活動を工夫する。

・どのような方法で何を伝えればよいのか練り合う活動を重視する。

(算数・数学科)

・算数・数学的活動を通して、言葉や図、式、表、グラフとの関連付けを図る。

・途中の過程や考えた内容を根拠を含めて、筋道立てて表現することを重視する。

(理科)

・観察・実験の結果を元に分析し、考察する活動を重視する。

・予想や仮説を設定し、検証する実験を計画する活動を重視する。

3 地区別の結果概要

(1) 小学校の平均正答率 (％)

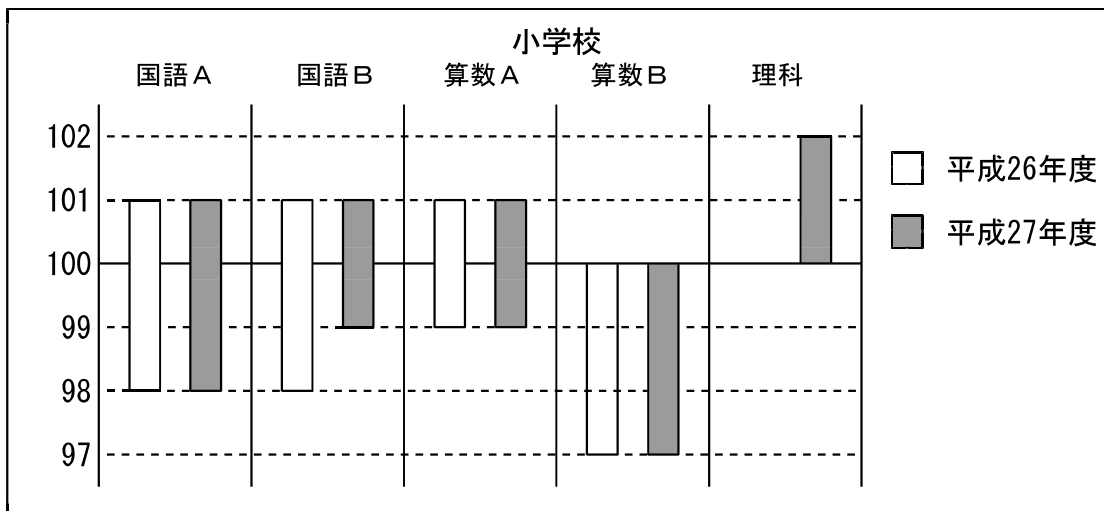
地区名 (教育事務所等)		鹿児島市	鹿児島地区	南薩地区	北薩地区	始良・伊佐地区	大隅地区	熊毛地区	大島地区	県平均	全国平均
小学校	国語 A	71.3	68.3	65.1	67.0	67.0	66.3	68.7	66.2	68.4	70.0
	国語 B	68.3	66.0	64.5	64.2	65.1	62.6	69.0	62.6	65.8	65.4
	算数 A	78.0	75.5	74.1	76.1	75.1	73.8	76.4	73.0	75.9	75.2
	算数 B	44.9	41.6	39.9	42.1	41.8	40.0	44.0	39.2	42.5	45.0
	理科	65.6	62.1	61.2	62.4	63.3	61.4	64.9	60.9	63.4	60.8

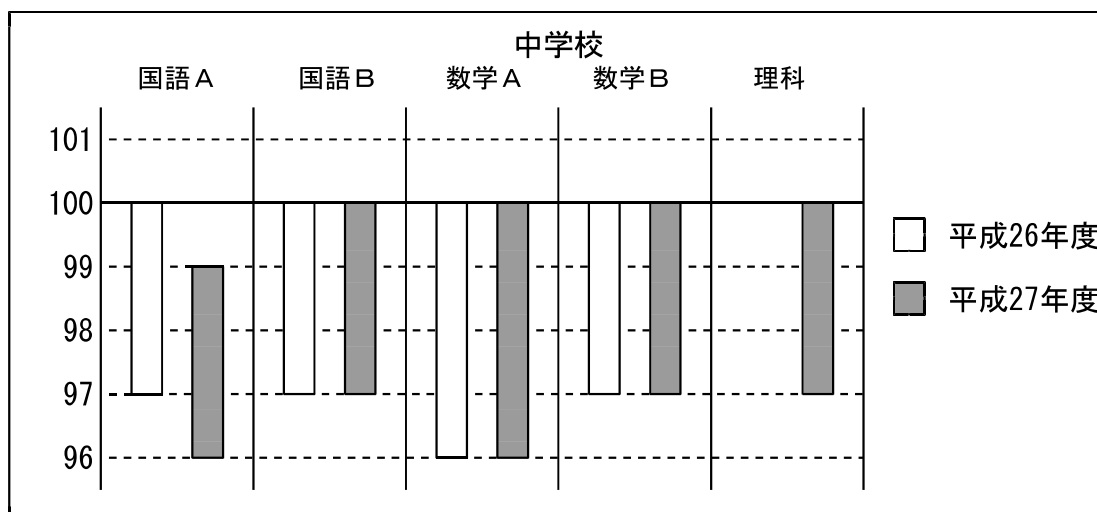
(2) 中学校の平均正答率 (％)

地区名 (教育事務所等)		鹿児島市	鹿児島地区	南薩地区	北薩地区	始良・伊佐地区	大隅地区	熊毛地区	大島地区	県平均	全国平均
中学校	国語 A	75.3	72.8	72.0	72.1	74.7	71.2	72.0	69.2	73.3	75.8
	国語 B	65.9	64.3	62.1	63.7	66.0	61.5	62.4	59.8	64.1	65.8
	数学 A	64.2	61.9	61.1	60.1	63.5	58.7	59.5	56.5	61.7	64.4
	数学 B	42.0	39.6	37.7	37.6	41.9	35.4	37.2	35.1	39.4	41.6
	理科	53.7	53.2	50.2	51.3	54.2	49.1	51.1	46.7	51.9	53.0

(3) 標準化得点 (全国の平均正答数を100として年度間の相対的な比較をする指標)

平成26年度と平成27年度の科目ごとに平均正答率が最も高い地区と最も低い地区の標準化得点を算出したものが次のグラフである。





※ 標準化得点の算出に当たっては、平均正答数が必要となるが、地区ごとの平均正答数の算出は困難なため、鹿児島市を含む8地区の平均正答率に各教科の問題数を乗じた数値を基に平均正答数を算出している。

(4) 結果分析及び対応策

- いずれの教科においても、正答率の高い地区と低い地区の標準化得点の差は5ポイント以内となっており、地区間のばらつきは小さいと言える。また、昨年度と今年度の各教科を比較すると、小・中学校ともに地区間の差に広がりは見られなかった。特に、小学校国語Bについては、正答率が低い地区の成績が全国平均に近づくなど、学力の底上げが見られた。しかしながら、小学校より中学校の方が差が開く傾向は継続しており、改善が急務である。
- 小学校においては、全国平均を上回る地区が複数あり、特に理科については全地区で全国平均を上回るなど全体的に改善傾向が見られるが、算数Bは全地区で全国平均を下回っていることから全体的な学力の引き上げが必要である。また、国語Aについては、課題解決的な学習を推進する中で、基礎的な定着が図られるよう、活動の中での見届けを重視する必要がある。
- 中学校においては、国語A、数学Aの基礎的な知識に関する問題において、全地区で全国平均を下回るなど厳しい状況が継続している。また、昨年度と比較しても、国語Aは全体的に学力の低下が見られ、指導法改善の効果が表れているとは言い難い。また、本県の上位に当たる地区の学力が全国平均の水準にとどまっており、中学生の学力を伸ばし切れていない状況もうかがえる。各教科で、主体的に課題を追究する場面を設定し、生徒一人一人が思考し、表現する学習を推進することによって、全体的な学力の底上げを図る必要がある。
- 各地区において、今年度から教科ごとに小・中学校の教員から成るコアティーチャーネットワークプロジェクトを立ち上げ、思考力、判断力、表現力等に関する評価問題や授業づくりを行っている。このプロジェクトを通じ、教員同士の教科ごとの横のネットワークと小・中学校の縦のネットワークの構築を進め、地域の実態を踏まえた指導法改善の推進をしていきたい。また、同じく今年度新たに立ち上げた授業サポートプロジェクトでは、義務教育課、教育事務所、市町村教育委員会がチームとして教員のニーズに応じた支援を行い、学校内外の教員の協働体制を進めている。
今後、本調査結果を2つのプロジェクトにも生かしつつ、各教育事務所の学力向上の取組の充実につなげていきたい。

4 指導法改善のポイント

国語【小学校第6学年】

正答の状況

各学年、各教科の正答率は次のとおりです。

年度	平成27年度		平成26年度		
	国語A	国語B	国語A	国語B	
平均 正答数	県	9.6問/14問	5.9問/9問	10.9問/15問	5.5問/10問
	全国	9.8問/14問	5.9問/9問	10.9問/15問	5.5問/10問
平均 正答率	県	68.4%	65.8%	72.5%	55.2%
	全国	70.0%	65.4%	72.9%	55.5%

今回の調査結果から明らかになった成果と課題

- 成果1 (A問題) 作品募集の案内の中から、必要な情報を読み取ること
- 成果2 (B問題) 目的や意図に応じ、取材した内容を整理しながら記事を書くこと
- 成果3 (B問題) 登場人物の気持ちの変化を想像しながら音読すること
- ▲課題1 (A問題) 文の中における主語を捉えること
- ▲課題2 (A問題) 話の内容に対する聞き方を工夫すること
- ▲課題3 (B問題) 目的や意図に応じ、記事に見出しを付けること

成果が見られた問題の概要例

○成果1 (A問題)

設問番号 7

【設問の概要】
応募のきまりを守っていないものを選択する。

	平均正答率		
	本県	全国	差
7	76.3	73.9	+2.4

○成果3 (B問題)

設問番号 3 二

【設問の概要】
声に出して読むときの工夫とその理由を書く。

	平均正答率		
	本県	全国	差
3 二	71.6	66.6	+5.0

4

夏祭りの絵と表取りをしたときの絵を二枚かいて両方送る。

心に残る 夏の風景

絵画コンクール 2015

夏祭りや自然体験など、あなたの心に残る夏の風景を絵にかいて送ってください。

◆応募のきまり

対象・部門

- ★小学校1・2・3年生部門
- ★小学校4・5・6年生部門

作品

- 未発表作品で、出品は一人1点に限ります。
- 白つ切サイズ(380×540mm)の画用紙を使用してください。
- 絵の具、クレヨンなどを自由に使ってください。
- 作品の裏面に、作品の題名、学校名、学年、氏名、自宅の住所を記入してください。
- 作品は、お返しできません。

締め切り

2015年(平成27年)9月18日(金) 必着

◆入賞者発表

2015年(平成27年)10月末日までに入賞した人に郵送で連絡します。

7

六年生の星野さんは、次の「作品募集」案内の一部を読んだ。◆応募のきまりを守っていないものを、あとの1から4までの中から一つ選んでその番号を書きなさい。

3

二

【設問の概要】
声に出して読むときの工夫とその理由を書く。

二 山田さんたちは、「切よるのちのお話」のおもしろさについて、「一生にこのように読んだらいいかな」と思っています。次の「読まぬのきまり」をよく読んで、あとの「問い」に答えてください。

【読まぬのきまり】

山田 一郎さん「一郎さんが来たときに、「お話を聞いてください。出てきないといけませんから。」と、お話を聞かなくてはいけません。」

小川 一郎さん「お話を聞かなくてはいけません。一郎さんが来たときに、「お話を聞かなくてはいけません。」と、お話を聞かなくてはいけません。」

一郎さん「お話を聞かなくてはいけません。一郎さんが来たときに、「お話を聞かなくてはいけません。」と、お話を聞かなくてはいけません。」

一郎さん「お話を聞かなくてはいけません。一郎さんが来たときに、「お話を聞かなくてはいけません。」と、お話を聞かなくてはいけません。」

課題が見られた問題の概要，問題点とその改善点，授業づくりのポイント（A問題）

課題が見られた問題の概要（A問題）

▲課題 1（A問題）

設問番号 2 一

【設問の概要】
文の主語として適切なものを選択する。

		平均正答率		差
		本県	全国	
2	一	40.2	53.1	-12.9

問題点とその改善点（A問題）

本問題は、〔第1学年及び第2学年〕「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（1）イ 言葉の特徴やきまりに関する事項（カ）文の中における主語と述語との関係に注意すること」（学習指導要領）を問う問題である。A問題の中で、唯一全国平均と10%以上差があった問題である。

本県の誤答傾向を見ると、小問1の主語については、8割を超える児童が正解できているものの、小問2の主語が捉えられていない児童が4割を超えており、全国平均のおよそ1.7倍にある。誤答者の多くは「アぼくの」または「イ妹の」を選んでおり、人物を表す語が主語であると誤って捉えていると考えられる。今後の指導の中で、文の意味を明確に伝えるためには、主語と述語とが照応することが大切であるということについて、読んだり、表現したりするときに強く意識できるように低学年から繰り返し指導することが必要である。

問題点及び改善点は以下のとおりと考える。

【問題点】

- 語句の性質や役割の上で類別があることが理解できていない。
- 人を表す語句が主語であると誤った捉え方をしている。

【改善点】

- ◎ 文の中における主語と述語、修飾と被修飾との関係などに注意させ、文を読んだり書いたりさせる。

2

次の一と二の問いに答えましょう。

一 1と2の文の主語として適切なものを、アからエまでのの中からそれぞれ一つ選んで、その記号を書きましょう。

1 ア 降っていた雨が、急にやんだ。

2 ア ぼくの妹の誕生日は、五月二日だ。

イ
ウ
エ

授業づくりのポイント（A問題）

- 螺旋的・反復的な学習が系統的に行われるように指導計画の見直しを行う。

《ポイント》

- ◎ 〔第1学年及び第2学年〕
「(カ)文の中における主語と述語との関係に注意すること」（学習指導要領 以下同じ）
述語のみの文を児童に提示し、主語を補って多くの文を作る中で、人物を表す語以外に事物や動物なども含まれることを指導する。
さらに、主語と述語が照応していない文を提示し、述語との関係を考えながら、文の誤りに気付かせ、主語と述語の照応について理解させる。
- ◎ 〔第3学年及び第4学年〕
「(キ)修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと」
文章の内容を理解するために、それぞれの文の中での主語と述語の関係や修飾と被修飾の関係の関係を明らかにしながら、文の組み立てを理解させる。また、主語と述語の関係の中で、述語には物の名前を表す語句（「何だ」）、動きを表す語句（「どうした」）、様子を表す語句（「どんなだ」）の3つに類別することができることを理解させる。
- ◎ 〔第5学年及び第6学年〕
「(キ)文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること」
文の構造から単文、複文、重文、重文に分ける活動の中で、主語と述語の照応についての理解を定着させたり、性質や機能から文の種類を理解させたりする。また、実際に複文や重文を用いた文を書かせる中で主語と述語の照応を確認する。

課題が見られた問題の概要，問題点とその改善点，授業づくりのポイント（B問題）

課題が見られた問題の概要（B問題）

▲課題3（B問題）

設問番号 ① 二

【設問の概要】
見出しの表現の工夫についての説明として適切なものを選択する。

		平均正答率		
		本県	全国	差
①	二	68.8	70.8	-2.0

問題点とその改善点（B問題）

本問題は、B問題の中で、全国平均との差が一番大きかった問題である。大見出しの候補に選択肢のア～ウは対応しており、選択肢自体の内容は正しいものである。その中で、「交流で広がる 心の輪」に適した選択肢を選ばなければならない。およそ2割の児童が誤答として「2」を選択した。
本問題では、「[第5学年及び第6学年]「B書くこと ウ 事実と感想，意見などとを区別することとともに，目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること」が問われている。
問題点及び改善点は以下のとおりである。

- 【問題点】
- 大見出しの3つの候補は選択肢のいずれかに対応しており、見出しの付け方としては正しい。実際の見出しの説明を選ぶという書き手のねらう効果と表現の仕方を正しく選択することができない。
 - 大見出しの働きから選択しており、書き手の意図が理解できていない。

- 【改善点】
- ◎ 見出しの付け方については、読者にどのような内容に興味・関心をもってほしいのか、何を伝えたいのかなど編集の目的や意図を明確にした活動を推進する。
 - ◎ 表現の仕方とその効果について理解する。

授業づくりのポイント（B問題）

〈「学びの羅針盤」より〉
【授業づくりのポイント】
・子どもが自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、単元を貫く言語活動を位置付ける。

《ポイント》
目的や意図に応じ、取材した複数の内容を的確に関係づけて記事を書くために

- ◎ 新聞で一番伝えたいことは何か編集の目的や意図を明確にし、見出しを工夫する。
- ◎ 体言止め、反復、倒置、呼びかけなどの表現の工夫について、その効果を考え、見出しや記事を書く。



国 語【中学校第3学年】

正答の状況

各学年、各教科の正答率は次のとおりです。

年 度		平成27年度		H26年度	
種 別		国語A	国語B	国語A	国語B
平均 正答数	県	24.2問／33問	5.8問／9問	25.0問／32問	4.4問／9問
	全国	25.0問／33問	5.9問／9問	25.4問／32問	4.6問／9問
平均 正答率	県	73.3%	64.1%	78.1%	49.1%
	全国	75.8%	65.8%	79.4%	51.0%

今回の調査結果から明らかになった成果と課題

- 成果1 (A問題) 文脈に即して漢字を正しく書いたり読んだりすること
- 成果2 (A問題) 代表的な古典の作品に関心をもつこと
- 成果3 (B問題) 状況に応じて、資料を活用して話すこと
- ▲課題1 (A問題) 語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと
- ▲課題2 (A問題) 伝えたい事柄が明確になるように文章の構成を考えること
- ▲課題3 (B問題) 文章の中心的な部分と付加的な部分などを読み分け、要旨を捉えること

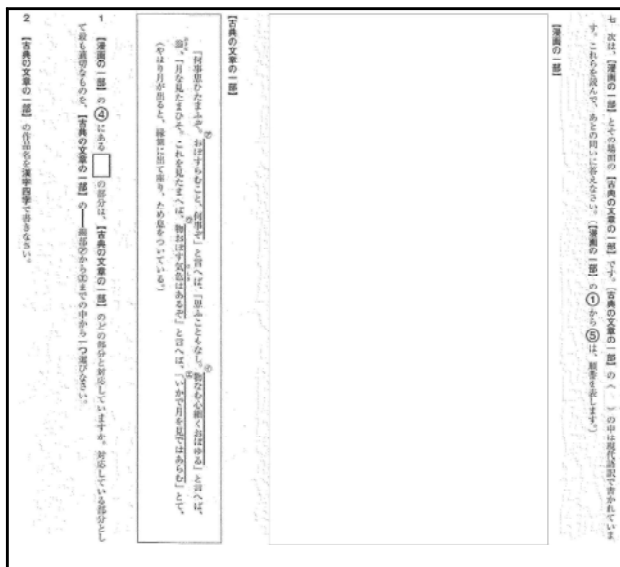
成果が見られた問題の概要例

○成果2 (A問題)

設問番号 9 七 2

【設問の概要】
古典の作品名を漢字で書く。

平均正答率			
9 七	70.2	66.7	+3.5



○成果3 (B問題)

設問番号 1 一

【設問の概要】
ノートのその他の情報を役立てられる場合として適切なものを選択する。

平均正答率			
1 一	73.9	73.2	+0.7



課題が見られた問題の概要，問題点とその改善点，授業づくりのポイント（A問題）

課題が見られた問題の概要（A問題）

▲課題 1（A問題）

設問番号 9 三 イ，エ，オ

【設問の概要】
適切な語句を選択する。（口火を切る，縁の下の力持ち，たなびく）

【平均正答率】			
	本県	全国	差
9 三 イ	48.5	55.5	-7.0
9 三 エ	60.3	70.8	-10.5
9 三 オ	41.6	49.0	-7.4

問題点とその改善点（A問題）

本問題は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する問題である。

9 一，二の漢字に関する事項については，本県の正答率は，全国平均と同程度かそれを上回る正答率であるのに対して，本問題については，正答率が全国を大きく下回る現状にある。

漢字の学習については，多くの学校で家庭学習に取り入れられており，定着が図られているが，慣用句やことわざ，語句の意味については，定着が不十分なことが明らかになった。今後，より丁寧な指導が求められる。

問題点及び改善点は以下のとおりと考える。

【問題点】

- 「口火を切る」という慣用句の意味が理解できていない。（平成20年度全国学力・学習状況調査 全国正答率55.4%）
- 「縁の下の力持ち」ということわざになじみがない。
- 「雲がたなびく」という語句の意味が理解できていない。（平成24年度全国学力・学習状況調査 全国正答率47.9%）

【改善点】

- ◎ 語句の辞書的な意味を基にして，文脈に即した意味を捉えられるように指導する。

授業づくりのポイント（A問題）

- 語句の意味を理解し，文脈の中で適切に使うことができるように工夫する。

《ポイント》

- ◎ 実際に使われている場面を取り上げてその意味を確認し，短文を作ったり，別の表現で言い換えたりする活動を「読むこと」の学習と合わせて指導する。
- ◎ 語句の意味や用法を具体的な場面と合わせながら学習させる。
- ◎ 日記指導や作文指導の中で，表現の仕方を工夫して情景が伝えられるような表現になるように指導する。
- ◎ 多様な種類の書物に触れ，語彙を広げる指導を継続する。

三 次のアからオの文では，最も適切な言葉や，カの文では，縦読みに当てはまる漢字として正しいものを，それぞれ（ ）の1から4までの中から一つ選びなさい。

ア 将軍は，① 気象 2 気性 3 起床 4 希少 予報士になりたい。

イ 彼がこの討論の① 火種 2 点火 3 火薬 ④ 口火を切った。

ウ 私が先生のお宅に① 承ります 2 いただきます ③ 参ります 4 いらつしやいます。

エ 彼女は，学級の① 縁 2 床 3 板 4 画の下の力持ちと言えず存在だ。

オ ① たてこもる 2 たならぬ ③ たなびく 4 たたずむ 雲の間から，春の光がもたえている。

カ 新聞を読む① ニュウカク ② 慣 ③ 判 4 感 を身に付ける。

課題が見られた問題の概要，問題点とその改善点，授業づくりのポイント（B問題）

課題が見られた問題の概要（B問題）

▲課題2（B問題）
設問番号 2 二

【設問の概要】
雑誌の記事に書かれていることとして適切なものを選択する。

平均正答率			
	本県	全国	差
2 二	63.7	67.8	-4.1

問題点とその改善点（B問題）

B問題においては、1一が全国正答率を0.7%上回ったことを除き、全9問中8問が、全国正答率を下回った。本問題は、その中で最も全国との差が大きかった問題である。
本問題では、文章の中心的部分と付加的な部分などを読み分け、要旨を捉えることができるかが問われている。
3つの資料の中の1つ「雑誌の記事の一部」を読んで、要旨を捉える問題である。
誤答については、具体例として書かれている「搭乗型ロボット」と「装着型ロボット」に関する説明の部分や、日本のロボット開発の一つの事実を要旨として捉えてしまったためである。書かれていることに間違いはないが、目的の応じて要約したり、要旨を捉えたりする学習の徹底が必要である。
問題点及び改善点は以下のとおりと考える。

- 【問題点】
- 文章の中心的部分（段落）と付加的な部分（段落）とを読み分け、要旨を的確に捉えることができていない。
 - 説明的な文章の要旨を捉えるためにキーワードを見付けたり、接続語などに注意したりして、事実と意見の読み分けができていない。
 - 段落の構成に注意しながら、中心となる段落を見付けることができていない。
- 【改善点】
- ◎ 「はじめ・なか・おわり」に注意するなど、論の展開の中心になる部分と、それを支える例示や引用などの付加的な部分を読み分けて、要旨を捉えることができるようにする。教科書教材の説明的文章の中で、論を裏付ける付加的な部分を一覧表にまとめたり、段落相互の関係を図でまとめたりするなどの学習を行う。

授業づくりのポイント（B問題）

〈「学びの羅針盤」より〉
【授業づくりのポイント】
・多様な本や資料を読むことに結びつける指導を工夫する。

- 《ポイント》
- ◎ 複数の本や資料から得た情報の中から必要な情報を取捨選択したり、まとめたりしながら自分の考えと結びつけて考える活動を取り入れる。
 - ◎ 自分の考えを主張する際に、それを支える資料を学校図書館やインターネットなどの情報から探し、文章で表現する学習を取り入れる。（単元を貫く言語活動）



The collage contains the following elements:

- Bar Chart:** A chart showing data for '発見型ロボット' (Discovery-type robots) and '搭乗型ロボット' (Crewed robots) from 2000 to 2010. The Y-axis represents the number of units, ranging from 0 to 1000. The X-axis shows years from 2000 to 2010. The chart shows a general upward trend for both types, with crewed robots showing a more significant increase in the later years.
- Magazine Article:** Titled 'Discover Tomorrow ~未来(あした)をつかもう~'. It discusses the development of robots and their potential impact on society. The text is in Japanese and includes sub-headings like '生活を支えるロボットの開発' (Development of robots that support life). It mentions that robots are being developed to assist with daily tasks and that there is a growing interest in them.
- Questions and Answers:** A list of multiple-choice questions (1-5) related to the article. Handwritten answers are provided for each question. For example, question 1 asks about the main purpose of the article, and the answer is 'C' (to introduce the development of robots).